

平野秀吉が作詞した

新潟県立小千谷高等女学校の校歌と 作曲者大和田愛羅と校長斎藤秀平

榎田善衛

一. はじめに

新潟県内の小中学校および高等学校の校歌作詞者の一人として、平野秀吉がおられる。平野秀吉が勤務していた新潟県高田師範学校（以下、高田師範学校）の音楽教員や卒業生との強い結びつきから、その作詞活動が県内に広まっていった経緯については既に述べたとおりである¹。

本研究ではこれまで紹介されることがなかった、平野秀吉作詞による新潟県立小千谷高等女学校（以下、小千谷高等女学校）の校歌制定の過程を明らかにしたいと考えている。この中で作曲者大和田愛羅の人となり、さらには平野秀吉とその依頼校長である斎藤秀平との関わり合い、また斎藤秀平の人となりと業績を明らかにできると考えている。

二. 平野秀吉が作詞した校歌とそれ以前の校歌

小千谷高等女学校は、小学校令改正（一九〇七（明治四十）年三月）

¹ 榎田善衛「平野秀吉が作詞した校歌と作曲者小林禮・田中信太郎・小出浩平」岡村鉄琴『新潟県文人研究第十九号』越佐文人研究、2015、pp.159-164。

による義務教育六年制を終えた生徒が入学するための四年制の女子中等教育機関であり、一九二二（大正十）年五月三日に小千谷町立小千谷高等女学校として開校した²。その後、一九二八（昭和三）年四月一日に県立移管、一九四八（昭和二十三）年四月一日に県立小千谷女子高等学校と改称され、一九五〇（昭和二十五）年四月一日に県立小千谷高等学校に統合された³。一九三三（昭和八）年制定の校歌は作詞を平野秀吉、作曲を大和田愛羅が手掛けている⁴。制定の経緯は一九三三（昭和八）年「八月四日県が指定した現在の小千谷高等学校の場所に県立小千谷高等女学校の工事が着工」されたことに端を発する⁵。女学校移東問題で町民の考えが二分、この問題の解決が新しい校歌制定のきっかけになったと推察される。ちなみに関徹（新制小千谷高等女学校十六回の卒業生）はその著書『人生歌に關ず—谷高歌物語』の中で、「昭和八年は、校歌がつくられてまだ五年しか経っていない。翌年校舎が信濃川東に移転することに合わせたの作り替えなのであるうか」と結んでいる⁶。

² 新潟県立小千谷高等学校『小千谷高等学校百年史』小千谷高等学校創立

³ 百周年記念事業実行委員会『2003、p.900』

⁴ 前掲2、p.904,922,924,925。

⁵ 前掲2、p.832。

⁶ 前掲2、p.177。

関徹『人生歌に關ず—谷高歌物語』越書房、2003、p.20。

小千谷高等女学校校歌（昭和八年）⁷ 作詞 平野秀吉 作曲 大和田
愛羅

（一番） 船岡山（ふなおかやま）の春（はる）の花（はな）
咲（さ）きて萬朶（ばんだ）の雲（くも）にほい
八海山（はつかいさん）の峰（みね）の雪（ゆき）
仰（あお）ぐ千（ち）くわの玉（たま）の色（いろ）
氣（け）高（だか）く清（きよ）く麗（うるわ）しく
磨（みが）く心（こころ）の姫鏡（ひめかがみ）
（二番） 魚沼（うおぬま）の水（みず）皆（みな）此処（ここ）に
集（あつ）めて速（はや）き信濃川（しなのがわ）
人（ひと）の力（ちから）の絶（た）えぬ時（とき）
ついの榮（さかえ）をこれ見（み）よと
越後（えちご）大野（おおの）にそゝぎては
秋（あき）のみのりとなりけり
（三番） よき国（くに）よき世（よ）うれし我（われ）
よき校（こう）よき師（し）たのし我（われ）
知遇（ちぐう）の幸（さち）をよろこびて
まなべいそしめいざや友（とも）
おみなのとつとめ母（はな）の道（みち）
しるべは誠（まこと）ひとすじに

これは平野の作詞の特徴をよく示している。例えば、三番目の「母の道」にあるように、平野は「○○の道」と作詞する場合が多い。

7 前掲2,p.832。読み仮名は中村忠夫氏（小千谷市）の聞き取り調査による。

一九二〇（大正九）年制定の能生尋常高等小学校二番目の歌詞には「人の道」、一九二二（大正十一）年制定の稲田尋常高等小学校の三番目の歌詞には「世の道 人の道」、一九二四（大正十三）年制定の三番目の歌詞には「子の道 民の道」、一九三三（昭和八）年制定の天野原尋常高等小学校三番目の歌詞には「学びの道」とあるからである。⁸

また小千谷高等女学校には、この校歌以前に二つの校歌「竹柏会なづかの歌」「小千谷高等女学校校歌（昭和三年―昭和八年）」が存在する。^{9,10} それぞれの歌詞を次に紹介する。

竹柏会の歌（大正十五年）¹¹ 採譜 南雲 充

（一番） 船岡山（ふなおかやま）の春（はる）の花（はな）
信濃川原（しなのかわら）の秋（あき）の月（つき）
その花（はな）の如（ごと）うるわしく
その月（つき）のごと輝（かがや）けと
磨（みが）き鍛（きた）うる心（こころ）と腕（かひな）
やがてはみ国（くに）の鑑（かがみ）ぞと
緑（みどり）の髪（かみ）のひとすぢに
学（まな）ぶ吾舎（わがや）の樂（たの）しさよ
（二番） 桐（きり）の林（はやし）はいやしげり

8 前掲1,pp.159-164。

9 前掲2,pp.154,177-178。

10 草野信「中学・女学校校歌」、『新潟県立小千谷高等学校同窓会』：http://

www.echigo.ne.jp/~ohs-obga/chuugakukouka.html（2016/4/30閲覧）

11 読み仮名は中村忠夫氏（小千谷市）の聞き取り調査による。

雪(ゆき)の小千谷(おぢや)も名(な)にし負(お)う

その林(はやし)より茂(しげ)かれと

その雪(ゆき)よりも名(な)を負(お)えと

緑(みどり)いやます姫松(ひめまつ)小松(こまつ)

枝葉(えだは)の栄(さか)え祈(いの)りつつ

梓(あずさ)のゆづるゆるみなく

いそしむ吾家(わがや)の楽(たの)しさよ

小千谷高等女学校校歌(昭和三年―昭和八年) 採譜 南雲 充

(一番) 旭日(あさひ)の燃(も)ゆる蕚生(ひう)ヶ丘(おか)

船岡山(ふなおかやま)の夕月夜(ゆうづきよ)

常緑(ときわ)の森(もり)は色(いろ)深(ふか)く

礎(いしずえ)固(かた)き大空(おおぞら)の

薨(いらか)に匂(にお)ふ松(まつ)と菊(きく)

我(わ)が学(まな)び舎(や)は愛(あい)の園(その)

(二番) 気(き)は晴(は)れ渡(わた)る信濃川(しなのがわ)

清(きよ)き流(なが)れに八海(はつかい)の

雄々(おお)しき靈姿(れいし)仰(あお)ぎ瞻(み)て

学(まな)びの業(わざ)や世(よ)の努(つと)め

いそしく励(はげ)みて教(おし)え草(ぐさ)

健気(けなげ)に育(そだ)て身(み)と心(こころ)

(三番) 雪(ゆき)に変(か)わらぬ姫小松(ひめこまつ)

薰(かお)りも高(たか)き菊(きく)の花(はな)

心(こころ)の鑑(かがみ)身(み)の友(とも)に

六条(むすじ)の校訓(おしえ)胸(むね)に彫(え)り

優(やさ)しく気(け)高(たか)く生(お)ひ立(た)ちて

婦人(おみな)の徳(とく)を守(まも)らなむ

前者は校友会「竹柏会」の歌として一九二六(大正十五)年に、

た後者は一九二八(昭和三)年の県立移管から一九三三(昭和八)年

の新校歌制定までの間に、それぞれ定められている。後者の歌詞の

注目すべき点として、「旭日の燃ゆる蕚生ヶ丘 船岡山の夕月夜」と

「六条の校訓」が挙げられる。「旭日の燃ゆる蕚生ヶ丘 船岡山の夕月

夜」は、一九二八(昭和三)年十二月十一日に「小千谷 町議会、

蕚生村との合併と女学校の東への移転を県知事に内申する議決を採

択」し¹⁴、翌年三月一日に「小千谷町、蕚生村の一部を編入」したこ

とにより¹⁵、蕚生村を象徴する「蕚生ヶ丘」が校歌に取り入れられた

ものと推察される。「旭日」は東を「夕月」は西を象徴するとともに、

一九二〇(大正九)年十一月一日に上越北線で宮内―東小千谷(現小

千谷)間開業、一九二二(大正十)年八月五日に上越北線で東小千谷(現

小千谷)―越後川口間開業し¹⁶、その後、上越線全線開通(長岡―高

崎)が予定(実際には一九三二(昭和六)年九月一日開通)され、駅

を有する信濃川東岸の繁栄を暗示しているようでもある。また「六条

「夢」ではなく「薨」が正しい。

「澹」ではなく「瞻」が正しい。

前掲2,p.904⁴

前掲2,p.904⁴

前掲2,p.899,906⁶

の校訓」とは、六つの訓令からなる校訓でその詳細は次のとおりである。¹⁷「一、常に教育に関する勅語の聖語を服膺し、学徳業務の研修を積み、以て献身君国に報ぜんことは我國民最高の義務なり。二、忠孝義勇は、我建國の精神にして國民道德の真髓國髓の精華なり。三、敬神崇祖は、祖先の懿風忠孝の發露にして報本反始の至誠を致す所以なり。四、温順貞淑にして堅忍不拔なるは我婦徳の本領なり。五、心身強健にし勤儉力行に怠らざるは、國運進展の基礎現代處世の急務なり。六、礼讓と協調とは、社交の要道にして共存共栄の秘法なり。」この校訓はおそらく一九二八（昭和三）年四月一日に県立移管された際か、その後定められたものと推察される。

三、作曲家大和田愛羅の音楽普及活動と校歌制定の過程

作曲家大和田愛羅が小千谷高等女学校の校歌に曲を提供するに至った経緯を明らかにするために、町立小千谷高等女学校として開校した一九二一（大正十）年五月三日から校歌が制定される一九三三（昭和八）年までの、小千谷高等女学校と新潟県内における大和田愛羅の音楽活動を次に紹介する。¹⁸

- 一九二一（大正十）年 九・十八 瞳詩社第二回音楽演奏会。商品陳列所。出演大和田愛羅、與田甚二郎、田辺圭介、小林禮ほか。
一九二二（大正十一）年 三・十 新潟商業学校校歌制定式。作詞相馬御風、作曲の大和田愛羅が独唱。

- 一九二三（大正十二）年 二・一 小千谷高女第一回音楽演奏会。狩野眞一（新潟高女）、若林孫次（長岡高女）、中越クワルトット会員吉澤実の各氏出演。六・二 新潟毎日新聞社主催の「民衆的音楽演奏会」（これが当日の音楽会のタイトル）。長岡座。出演上田友亀、大和田愛羅、小出浩平、（略）。十一・二十五 小千谷高女第二回音楽演奏会。

- 一九二四（大正十三）年 十一・二十三 小千谷高女第三回音楽演奏会。

- 一九二六（大正十五）年 十二・二十一 新津高女卒業生有志の秋葉音楽同好会主催第一回演奏会。富士館。主演は塚田花子、田中信太郎、大和田愛羅、氏家滋子。十一・十四 小千谷高女音楽会。

- 一九二七（昭和二年）年 十一・十五 小千谷高女音楽会。
一九二八（昭和三年）年 十二・二十八 小千谷高女御大典記念音楽演奏会。出演大和田愛羅。

- 一九三〇（昭和五）年 十一・十一 加茂高女新校舎落成記念音楽演奏会。出演大和田愛羅、塚田花子、田中宏、小出政子。

- 一九三二（昭和六）年 二・二十一 新発田校、作曲家大和田愛羅を迎えて校歌制定式。御免町校舎。

これまで明らかになった事実をまとめると次の四点に集約される。

- (ア) 大和田愛羅は一九二八（昭和三）年に小千谷高等女学校を訪れ、「御大典記念音楽演奏会」に出演している。(イ) 小千谷高等女学校は一九二八（昭和三）年四月一日に県立移管され、校歌制定の氣運が高まる。(ウ) 小千谷高等女学校は時を経ずして二曲の校歌（昭和三年—昭和八年（採譜南雲充）、「昭和八年（作詞平野秀吉、作曲大和田

¹⁷ 前掲2, p.178。

¹⁸ 関徹『新潟県音楽文化資料 明治・大正・昭和』

越書房2010, p.62, 63, 69, 73, 79, 89, 90, 97, 107, 123, 125（著者野線引）。

愛羅」が存在する。(エ) 関徹が著書『人生歌に關ず—谷高歌物語』で「この二つの校歌¹⁹のメロディは同じに聞こえる」と感想を述べており、「昭和三年—昭和八年(採譜南雲充)」と「昭和八年(作詞平野秀吉、作曲大和田愛羅)」の校歌はいずれも大和田愛羅の作曲と考えられる。

この四点から小千谷高等女学校における校歌制定の過程は、次のように推察できる(図1)。

小千谷高等女学校は一九二八(昭和三年)四月一日に県立移管され、校歌制定の気運が高まった。同年十月二十八日、同校で開催された御大典記念音楽演奏会に大和田愛羅が出演し、それが縁となり、最初の校歌、すなわち「昭和三年—昭和八年(採譜南雲充)」が制定された。作詞者は不詳であるが、作曲者は大和田愛羅である。このときの校長は三代目の森田萬吉であり、課題の多い一九二五(大正十四)年十二月七日から一九二九(昭和四年)年三月三十日まで校長を務め、その在任期間は三年四ヶ月間²⁰。その後、一九三二(昭和七年)年三月十九日に「高等女学校、移東決定」し²¹、同年三月三十一日に齋藤秀平が就任すると、新しい校歌の制定が必要となり、「昭和三年—昭和八年(採譜南雲充)」の校歌の歌詞のみを変更し、新しい校歌「昭和八年(作詞平野秀吉、作曲大和田愛羅)」が制定されたと推察される。ちなみに、平野秀吉が作詞した校歌の大半は高田師範学校の音楽教員が作曲しており、校歌を依頼した齋藤秀平も高田師範学校から異動してきたこと

を考えると、作曲は高田師範学校の音楽教員に依頼するのが自明の成り行きである²²。曲が変更されなかった理由は、すでに大和田愛羅が音楽教育界の巨星であり、歌詞のみの変更にとどめた方がよいとの校長の判断があったと推察される。

四・大和田愛羅の人となり

大和田愛羅の人となりを明らかにするために、その略歴を示した文章を次に紹介する。文章は六編あり、出版年代に従って示すと次のとおりとなる。

① 一九六八(昭和四十三)年八月十一日発行『明治百年記念 新潟先賢偉人展目録』²³

東京音楽学校声楽科を出、東京芸大講師。音楽教育者として活躍、また合唱発展のためにつくす。音譜と音程等の著がある。

② 一九七二(昭和四十七)年一月二十五日発行『越佐人物誌上巻』²⁴

村上市の出身で、関東合唱連盟顧問で東京芸術大学講師であった。昭和三十七年八月十一日七十六才でなくなった。『新潟県年鑑』

③ 一九八一(昭和五十六)年五月十五日発行『蒲原五十九号』²⁵
去年十一月七日、村上市駅前廣場の母子像のあった場所に、缺の

²² 前掲1,p.159-164。

²³ 新潟県美術博物館『明治百年記念 新潟県先賢偉人展目録』新潟県美術博物館1968,p.29。

²⁴ 牧田利平『越佐人物誌 上巻』野島出版1972,p.199。

²⁵ 鈴木鉦三「大和田愛羅の記念碑について」市島キヌら『蒲原五十九号』継志会1981,p.34-36,40(著者野線引)。

¹⁹ 小千谷高等女学校校歌(昭和三年—昭和八年(採譜南雲充))と(昭和八年(作詞平野秀吉、作曲大和田愛羅))の二曲を示す。

²⁰ 前掲2,p.903-905。

²¹ 前掲2,p.907。

入った切符の形をした黒御影石の、新しい記念碑が建てられ、除幕式が行われました。駅の方に面した側には稲葉修先生の字で、文部省唱歌「汽車」の一番の歌詞が（略）彫られています。これは東京の村上郷友会が創立百周年を記念して建てたものです。「今は山中、今は浜」の唱歌（略）。「汽車」の作曲者が大和田愛羅であることを知っている人は誰も居らなかったようです。（略）。さて、大和田愛羅ですが、父は大和田虎太郎、母はカツといひます。大和田の家は二両二人扶持で（略）。祖父清明はじめ一家は明治御維新後程なく村を離れたようです。愛羅は明治十九年三月二十四日に東京本郷で生まれましたが、父は愛羅が六歳の時に二十七歳の若さで仙台で没しました。祖父の勤めの関係があつたのでしょうか、愛羅は新潟中学校（今の県立新潟高校）を卒業した後、東京音楽学校（今の東京芸術学校）に入り、更に同校研究科で研さんを重ねました。研究科を卒えた後、明治四十四年七月に東京府立女子師範学校教諭兼東京府立第二高等女学校教諭に任ぜられ、昭和十八年四月に東京第一師範学校教授²⁶となりました。終戦後は東京音楽学校から東京芸術大学に職を奉じましたが、昭和二十六年に退官し、上野学園音楽大学教授となりました。また明治大学音楽部や国立音楽学校など多くの学校や団体に関係して、後進の指導に当たっていました。愛羅の作曲したものは、実に百余曲の多くに達していますが、声楽家でしたので、いずれも歌い易いものとして親しまれています。その代表的なものが「汽車」ということになりませんが、石丸昌一の「ぼくの作った飛行機」・西條八十「いもむし（ころもむし）」・西條八十「白帆」。

26
教諭が正しい。

山崎睦子「願ひ」などです。また校歌の作曲も多く、村上小学校（本町校）や、母校の県立新潟中学校などがあります。愛羅は昭和三十七年八月十一日に東京で没し、遺骨は菩提寺の村上市塩町の安泰寺に埋葬されました。享年七十七才でした。愛羅は東京生まれだから、故郷は東京だなどと云う人がありますが、大和田家の本籍は今も村上にあり、村上鮭産育養所が三面川で鮭漁業をやっていた戦争直後迄は、鮭の配当を受けていましたから、愛羅は村上の言葉で云えば「鮭の子」になります。（村上郷土研究グループ幹事）

④ 一九九二（平成四）年三月三十一日発行『村上市史 資料編9 近現代六 教育文化人物編』²⁷

大和田愛羅（音楽家）。明治十九年（一八八六）三月二十四日、東京市牛込区（東京都新宿区）下宮北町に大和田虎太郎の長男として出生。祖父清晴は村上藩士で、村上本町一六五七番地（村上市庄内町）に住んでいたが、明治維新後、村上を去り新潟に移転する。熱心なキリスト教徒で、東仲通教会の牧師であり、医師として教会病院に勤務していた。父は陸軍軍医であつたが二八歳で夭折した。愛羅は新潟師範学校付属小学校から新潟県中学校（現・県立新潟高等学校）に入学。小田竜太と同期である。明治三十八年（一九〇五）三月卒業。東京音楽学校（現・東京芸術大学）本科声楽科に入学、更に研究科に進み、同四十四年三月卒業。東京府立女子師範学校兼府立第二高等女学校の教諭となる。昭和十八年（一九四三）四月、

27
村上市『村上市史 資料編9 近現代六 教育文化人物編』
村上市:1992,p.662（著者野線引）。

東京第一師範学校教授²⁸に任ぜられたが、傍ら同志と四部合奏団を作り、音楽の普及に尽瘁する。第二次世界大戦後は東京芸術大学に奉職し、一方関東合唱連盟顧問や全国学校合唱コンクールの審査員を勤める。昭和二十六年退官、上野学園芸術大学の教授となり、また明治大学・慈恵医大・国立音楽学校・東洋音楽学校その他いくつかの学校の音楽の指導に当たった。昭和三十七年（一九六二）八月十一日没。享年七七。愛羅の作曲集には百四曲が載っているが、中には村上尋常高等小学校校歌（作詞相馬御風）、新潟中学校校歌（作詞相馬御風）、新潟高等学校校歌（作詞堀口大学）外いくつかの学校の校歌やまた親しまれている作品に「叱られて」（作詞前田花）「夕やけ小やけ」「白帆」（作詞西条八十）「汽車」（文部省唱歌）などが入っている。昭和五十七年、結成百周年記念として、東京村上郷友会の発意により、村上駅前広場に「汽車」の歌詞を刻んだ碑が建てられ、愛羅の曾孫に当たる大和田景子の手によって除幕が行われた。著書、『中等教育女子新音楽』（昭和八年、盛林堂書店）、『新進音楽教本』（昭和十三年、盛林堂書店）外、『越佐人物誌』『お城山だより』No.12、「村上新聞」昭和三七・八・二八、「新潟高等学校 東京都大和田浩氏提供資料」

⑤ 二〇〇六（平成十八）年六月二十日発行『鮭の子ものがたり』歴史に残る人々²⁹

内容は前記④を大部分引用しているため省略する。

²⁸ 教諭が正しい。

²⁹ 村上城跡保存育英会『鮭の子ものがたり』歴史に残る人々』
村上市、2006、pp.90-92。

⑥ 二〇〇六（平成十八）年発行『大和田愛羅（一八八六～一九六二）』³⁰

大和田愛羅は明治十九年三月二十四日、村上出身の医師大和田虎太郎の長男として現在の東京都新宿区に生まれた。祖父・清晴は旧村上藩士。明治二十四年、父・虎太郎が急逝。その後、母・カツと幼い三人の姉妹と共に新潟市の祖父・清晴の元で中学校卒業までを過ごす。祖父の清晴は、新潟の教会の牧師兼医師であり、愛羅の音楽の素養はこの教会音楽によって培われたと考えられる。明治三十八年旧制新潟中学（現新潟高校）卒業後、東京音楽学校（現東京藝術大学）声楽科へ入学。明治四十二年、同校卒業後も更に研究科へと進み、専門の声楽（独唱）のほかに合唱、作曲、チェロなど多岐にわたって修学する。明治四十四年、東京音楽学校研究科終了³¹。その後、東京府女子師範学校（現東京学芸大学）、東京府立第二高等女学校（現東京都立竹早高等学校）で教鞭をとり、教育音楽の道を歩む。以降、昭和二十一年までの三十余年間、教職を通して教育音楽、とりわけ合唱の普及に活躍する。明治四十五年（大正元年）には愛羅作曲の「汽車」（乙骨三郎作詞）が文部省唱歌に入選する。その後も「荷車」「飛行機の夢」などの愛羅作曲の作品が児童唱歌（のちの幼年唱歌）に採用される。大正二年、東京音楽学校の恩師で「早春賦」の作詞で知られる吉丸一昌教授の媒酌により

³⁰ 村上歴史文化館『大和田愛羅（一八八六～一九六二）村上歴史文化館、2006、2p（著者野線引）。これは「大和田愛羅唱歌祭」が行われた二〇〇六（平成十八）年九月十八日前後に作成された、同館の展示・配布資料である〔副館長の板垣慎一氏の証言による〕。

³¹ 修了が正しい。

新潟県新発田市出身の坪川きくと結婚、四男一女を儲ける。大正四年、小松耕輔（ピアノ）、東儀哲三郎（バイオリン）、愛羅（チェロ）

の三人が発起人となり、「音楽普及会」を結成。大正八年まで各地

での演奏会を通して西洋音楽の普及に努めた。その後、大正十一年

に東京混声合唱団理事に、昭和五年に文部省唱歌の編集機関である

日本教育音楽協会員にそれぞれ就任。昭和十一年には愛羅作曲の

「願い」（山沢睦子作詞）が国民歌謡入選を果たす。数多くの合唱団

を編成・指揮し、精力的に合唱活動を行うようになるのはこの頃から

である。昭和十七年、国民音楽協会役員に就任。昭和二十一年、

長きにわたり勤めた東京府女子師範学校、東京府立第二高等女学校

を退職するが、その後も上野学園大学、東京藝術大学など多くの学

府に迎えられ、教育音楽の発展に大きく寄与した。昭和三十七年八

月十一日、脳梗塞により永眠。享年七十六歳。墓所は村上塩町の

安泰寺。その生涯で作曲した数は一五〇曲以上で、当時の文部省選

定教科書である「中等教育女子新音楽」なども著している。大変な

人情家で、幼くして父を亡くして淋しい思いを味わったせいから、親

戚・友人など大勢を自宅や避暑地に集めて賑やかに過ごすことが好

きであったという。狩猟・投網が趣味で、捕れた鳥、魚も自ら調理

する好き嫌いのない健啖家であった。また、酒もよく嗜み、酔うほ

どに「江差追分」「佐渡おけさ」を明るく歌われたという。明るい

酒であった。―愛羅作曲のおもな楽曲― 汽車（乙骨三郎）、白帆

（西条八十）、夜更け（堀口元）、沼べり（北原白秋）、夢のお国（大

和田愛羅）、蟹と海鼠（吉丸一昌）、村上本町尋常高等小学校校歌（相

馬御風）、旧制新潟中学校校歌（相馬御風）、新潟高等学校校歌（堀

口大学）、新潟商業学校校歌（相馬御風）、（ ）は作詞者。本文資

料提供者 大和田清 桂暢生 桂幸子（敬称略 順不同）。

以上の③～⑥の記載内容の検証から、大和田愛羅の人となりについて論証する。具体的には次の六点。

（ア）祖父の名前について。③は「清明」とあるのに対し、④と⑥は「清晴」。村上歴史文化館で展示されている大和田愛羅の戸籍抄本によると、「前戸主 大和田清晴」「父 大和田虎太郎 母 カツ 長男」とある。したがって、祖父の名前は「清晴」が正しい。

（イ）大和田愛羅が昭和二十六年に退官した後に、教授に就任した大学等の名称について。③は「上野学園音楽大学」とあるのに対し、④は「上野学園芸術大学」、⑥は「上野学園大学」とある。上野学園大学の沿革によれば³²、大和田愛羅が退官したのが一九五四（昭和二十六年）三月だとすると、その二年前の「一九五二（昭和二十四）年四月」に「上野学園短期大学音楽科」を設置している。したがって、大和田愛羅が東京芸術大学を退官した後に就任した大学等は、上野学園短期大学音楽科となる。ちなみに、退官の二年後の「一九五六（昭和二十八）年四月」に「上野学園大学音楽部」設置とあるため、大和田は大学設置にともない短期大学から大学に移籍したことも推察でき

る。
（ウ）「汽車」の碑の建立年について（図2）。③は「昨年十一月七日」とあり、出版年を考慮すると「一九八〇（昭和五十五年）年十一月七日

³² 上野学園大学「学園概要 沿革」：<http://www.nenogakuen.ac.jp/university/about/gakuen/history.html> (2016/6/5閲覧)

となる。これに対して④は「昭和五十七年³³」とあり③と記載が異なる。東京村上郷友会の沿革によれば³⁴、「昭和五十五年十一月 創立一〇〇周年記念として、村上市出身者大和田愛羅氏作曲『汽車』の碑を村上駅前建立、村上市へ寄贈し、村上市民会館にて記念式典を行う」とある。このことから、碑の建立は「一九八〇（昭和五十五年）十一月七日」が正しい。

(エ) 大和田愛羅の墓所について。③と⑥とも「安泰寺」とある。正式には「臨濟宗妙心寺派護国山安泰寺」が正しい。墓碑の正面は「大和田家之墓」、側面は「昭和二年³⁵三月建立 大和田愛羅」とあり、愛羅四十一歳のときに建立されたことが明らかとなった(図3、図4)。(オ) 新潟県内の校歌の作曲状況について。新潟市内の小学校三校³⁶と高等学校二校の校歌を作曲しており、それぞれ制定年代に従って示すと次のとおりとなる。(一) 新潟市立湊小学校校歌(一九二二(大正十二)年十二月制定、作詞相馬御風、作曲大和田愛羅)。(二) 新潟市立栄小学校校歌(一九二八(昭和三)年十月制定、作詞相馬御風、作曲大和田愛羅)。(三) 新潟市立山潟小学校校歌(一九四〇(昭和十五年)年六月三十日制定、作詞大塚義明、作曲大和田愛羅)。(四) 旧制新潟県立新潟商業学校(新潟県立新潟商業高等学校)校歌(一九二二

³³ 西暦一九八二年。

³⁴ 東京村上市郷友会事務局「東京村上市郷友会のあゆみ」、『東京村上市郷友会』：<http://www.murakami21.com/murakami/ayumi.html> (2016/8/1閲覧)

³⁵ 西暦一九二七年。

³⁶ 新潟市義務教育史編さん委員会『新潟市立学校沿革略誌』新潟市教育委員会、1991, pp. 90, 97, 145。

(大正十二)年三月十日制定、作詞相馬御風、作曲大和田愛羅³⁷。(五) 旧制新潟県立新潟中学校(新潟県立新潟高等学校)校歌(一九二二(大正十二)年七月一日制定、作詞相馬御風、作曲大和田愛羅)³⁸。この他にも村上本町尋常高等小学校校歌や新発田市立赤谷小学校校歌などがある。

(カ) 山田耕筈との関係について。『東京音楽学校一覽』従大正二年至大正三年³⁹によると、大和田愛羅は「聲樂部 明治四十二年⁴⁰三月卒業」の欄に「東京女子師範學校教諭兼東京府立第二高等學校女學校教諭本校教務囑託 大和田愛羅 新潟士族」とある。ちなみに同期の卒業生は「小倉すゑ 福島平民」「元安東 太田恒 長野華族」の二名がいる。また大和田の一年前、すなわち「聲樂部 明治四十一年⁴¹三月卒業」の欄に「獨國留學 山田耕作 大阪平民」と記載されており、その同期卒業生は「私立日本女子大學校附屬高等女學校教諭 伊藤鈴 東京平民」の一名のみである。このことから、大和田愛羅

³⁷ 旧制新潟商業学校の校歌は「一九二二(大正十二)年三月十日、(略)制定式」あり。「作曲の大和田愛羅が独唱」(関徹『新潟県音楽文化資料 明治・大正・昭和』越書房、2010, p. 63)。

³⁸ 旧制新潟中学校の校歌は「一九二二(大正十二)年七月一日、新講堂に於いて」行われた「創立三十周年記念式並びに、改築落成式及び勤続職員表彰式」の式典閉式時に職員生徒が合唱した、この日のために作られた歌である。これが「いまなお歌われる『玲瓏の天』」であり、「作詞は相馬御風、作曲は大和田愛羅(十二回)に依頼した(新潟県立新潟高等学校『青山百年史』新潟高等学校創立百周年記念実行委員会、1991, pp. 195-196)」。

³⁹ 東京音楽学校『東京音楽学校一覽』従大正二年 至大正三年』東京音楽学校、1913, pp. 127, 128, 158。

⁴⁰ 西暦一九〇九年。

⁴¹ 西暦一九〇八年。

は声楽部出身で、同部の一年先輩には山田耕筰がいることが明らかとなった。ちなみに、大和田は研究科も修了しており、「明治四十四年⁴²三月二十五日修了」の欄に「聲楽 大和田愛羅 新潟士族」とある。また一年前の「明治四十五年⁴³三月二十五日修了」の欄には「七口 信時潔 大阪士族」の名もみえる。

五、平野秀吉と斎藤秀平

小千谷市民の多くは「昭和八年八月より進めていた新校舎の工事が完了、昭和九年五月十日」⁴⁴に、小和田毅夫校長（皇太子妃雅子様（祖父）が引つ越し作業の陣頭指揮に立ち、新校舎竣工式と記念行事を主導したため、校歌制定も小和田毅夫が行ったと考えがちである。しかし、校歌制定時、すなわち一九三三（昭和八）年時の校長は斎藤秀平であり、在任期間は一九三二（昭和七）年三月三十一日から一九三四（昭和九）年三月三十日までの二年間。斎藤秀平の略歴を示した文章は数編存在するが、ここではそのうち六編について出典年代に従って示す。

① 一九三六（昭和十一）年四月二十五日発行『越佐名士録』⁴⁵

新潟市一番堀通官舎。本縣文七郎氏長男、明治十七年五月八日北蒲原郡中條町に生る。同四十年高田師範卒業、滋賀、高田各師範教諭、小千谷高女學校長を経て、昭和九年中野財團新潟郷土博物館長、縣史編纂主任として令名がある。「吉野朝に於ける越後勤王黨」の

著あり。正六位。趣味 古文書、石器時代遺物。

② 一九三八（昭和十三）年十二月一日発行『越・佐傑人譜』⁴⁶

正六位 中野財團新潟郷土博物館長 縣史編纂主任 新潟市一番堀通官通官舎電三三四二。

明治十七年五月八日日本縣の舊家齋藤文七郎の長男として北蒲原郡中條町に於て生れ後家督を嗣ぐ。長じて高田師範學校に學び同四十年之を卒業、直ちに教育界の人となり滋賀師範學校高田師範學校の各教諭に任じ、専心教育者の涵養に努め小千谷高等學校長に就任し、篤實温厚なる其の人格を畏敬されたり。さらに昭和九年中野財團新潟郷土博物館長に推され縣史編纂主任として、廣汎なる學識と深遠なる造詣とを謳はる。常に眞摯なる研究心を保持し古文書、石器時代遺物古墓の研究家として偉名を馳す。宗教は禪宗たり。【家庭】妻遺子（明二〇）本縣小原又四郎長女新潟女工藝卒 長男秀夫（明四四）高田師範卒 長女晴子（大七）新潟高女高等科卒 二男敏文（大二〇）新潟中在 三男隆英（大一一五）。

③ 一九六一（昭和三十六）年二月二十五日発行『新潟県史 上杉時代篇（上巻）』⁴⁷

著者の略歴。私の生れは明治十七年十月三十日で、この時、外祖松本俊平翁（号を碧水老人といつた）は嬉んで名づくるに秀平とし、その将来を卜して、秀而不実者有矣夫（ヒイデテミノラザルモノアルカ）と書き与えられた。

西曆一九一一年。

西曆一九一二年。

前掲2, pp. 178-179。

坂井新三郎『越佐名士録』坂井新三郎, 1936, p. 763。

日本風土民族協會『越・佐傑人譜』日本風土民族協會 1938, pp. 24-25。

齋藤秀平『新潟県史 上杉時代篇（上巻）』野島出版, 1961, pp. 413-415（著者畧線引）。

然し生来愚鈍な私は、何の為すところもなく、碌々として日を送り、遂に高田師範学校へ入学して、明治四十年三月三十一日、同校を卒業し、同日、古志郡朽堀尋常高等小学校校長に任ぜられ、更に南蒲原郡見附町見附尋常高等小学校や、北蒲原郡中条尋常高等小学校に転じ、又更に大正六年十二月に至り、滋賀県師範学校地理科主任教諭兼滋賀県立膳所中学校教諭となった。

此時、令名一世に高かった新井石禅禪師に参して、座右銘を乞うたが、禪師は、

克忠克孝 能修其学 惟信惟義 能尽其職
堅忍自強 能守其志 至誠寛怒 能成其德

護国石禅布衲

と書き与えられた。自来この語を以て、自誠とした。

夫れから大正十四年三月三十一日に、高田師範学校教諭兼舎監長となり、昭和七年三月三十一日、新潟県立小千谷高等女学校長となり、更に昭和九年三月三十一日、新潟郷土博物館長に転じ、同二十年三月三十一日、同館廃止のため自然退職となった。

昭和二十八年十月に至り、公選で新潟県教育委員となったが、昭和三十一年に教育委員会が推薦制に改められるに至り、自然解任となり以て今日に及んだ。

本年十月二十五日は亡父の三十三回忌に当り、又同月二十六日は亡母の十七回忌に当るので、その墓前に参拝して、

ありし日の 父の面影 ありありと

ゆめみしものを 夢にてありしな
古反古を とり出してみれば 亡き母か

寒さいとえよ 児等風ひかすなと

との偶感を詠じた。尚私の号の蘭汀については、旧師佐藤膳翁先生が左の頌を与えられた。

(略)

昭和三十五年十一月吉

隋流去士 蘭汀秀平

④ 一九七二(昭和四十七)年一月二十五日発行『越佐人物誌 上巻』⁴⁸ 郷土史家。明治十七年五月八日、北蒲原郡中条町で生まれた。高田師範学校卒業⁴⁹、栃尾市立朽堀小学校校長となり文検に合格し滋賀県師範学校教諭として滋賀都跡を発掘した。後高田師範学校教諭、小千谷高等女学校校長、新潟郷土博物館長、県立図書館長、公選による県教育委員等を歴任した。若くして郷土史の研究を志し、史料の収集につとめた。昭和三十四年四月から三十九年九月までに出版された新潟県史五冊(鎌倉時代篇、上杉時代篇上下、江戸時代篇上下)は、五十年間収集した史料をもとにした著述である。古野朝⁵¹の越後勤王党(昭和十三年)中頸城郡誌四卷(昭和十五年九月から十六年九月まで)郷土アルバム(昭和三十二年七月)新潟県名勝天然記念物調査報告書、本庄氏の興亡等郷土史関係の著書が多い。昭和四十一年一月十四日に八十三才でなくなった。

⑤ 一九七七(昭和五十二年)十月二十五日発行『新潟県民百科事典』⁵² 一八八四—一九六六。考古学者、郷土史家。北蒲原郡中条町出身。

前掲24, pp. 399-400。

高田師範学校卒業が正しい。

滋賀師範学校が正しい。

吉野朝が正しい。

野島出版編集部『新潟県民百科事典』野島出版, 1977, p. 399-400。

高田師範学校卒。中等教員検定試験に合格、滋賀師範教諭から高田師範に転任。頸城地方や県内各地の古墳、史跡、遺跡を調査研究し、研究会を組織。研究家の養成、研究発表、出土遺物保管展示等教育活動を通じて大いに考古学界を振興した。新潟県郷土博物館長、新潟県教育委員、新潟県文化財審議委員など歴任。新潟県文化財関係に直接たずさわるや、『新潟県史跡名勝天然記念物調査報告書一―七卷』（一九二四―一九三四）新潟県先史時代の編年など画期的な業績を残し、文化財保護やPRに報道機関を通じ貢献した。著書に『新潟県史』五卷、『吉野朝の越後勤王党』、『中頸城郡誌』等。（室岡博⁵³）

⑥ 二〇〇四（平成十六）年十二月七日発行『郷土の碩学』⁵⁴
郷土史家齋藤秀平は、明治十七（一八八四）年十月三十日、北蒲中条町で生まれた。（略）。明治四十年高田師範学校卒業。古志郡栃堀尋常小学校を振り出しに、見附小、中条小に勤務。中等教員検定

⁵³ 室岡博は渡辺慶一と共著で一九九八（平成十）年に『頸城の良寛 絵師 東洋越陳人』と題した著書を出版している。そこに記されている室岡氏の経歴は「明治四十三年五月十八日生。中頸城郡柿崎町雁海四三五。高田師範学校専攻科卒。栃尾市上塩、長岡市関原小、柏崎市青年学校、柿崎中・小学校長（吉川町竹直、名立町、能生町木浦、磯部）、高校講師（柏崎・柿崎・吉川）。新潟県考古学会顧問。町村史編さん委員（妙高高原町・妙高村・中郷村・大潟町・頸城村・吉川町・柿崎町（現在編さん委員長代理））。この室岡氏の経歴と、齋藤秀平が「一九二五（大正十四）年に高田師範学校に転任」（佐々木美智子「県考古学研究に寄与―齋藤秀平」、竹田武英『郷土の碩学』新潟日報事業社2004,p.132.）したという事実から推察すると、室岡氏は高田師範学校で齋藤秀平教諭から薫陶を受けたと考えられる。

⁵⁴ 佐々木美智子「県考古学研究に寄与―齋藤秀平」、竹田武英『郷土の碩学』新潟日報事業社2004,pp.132-134。

試験に合格して、大正六（一九一七）年滋賀県に赴き、師範学校地理科主任・膳所中学校教諭を兼務。ここで京大の喜田貞吉をはじめ、著名な歴史学者・考古学者・古文書学者と出会った（略）。大正十四年高田師範学校に転任。前任地で得た方法を参考に研究会を結成。県内遺跡の全面的調査を行ってその結果を整理発表し、新潟県における考古学研究に画期的進展をもたらした。（略）。昭和七（一九三二）年、突如小千谷高等女学校長となったが、二年後には教育界を退き、新潟郷土博物館長に就任。（略）昭和二十年三月、博物館の閉鎖が決定された。その後も秀平は県立図書館長、県文化財保護連盟会長、県教育委員など社会教育や文化行政の面で活躍した。（略）考古学の成果は、大正五年から県が遂次刊行した『新潟県史跡名勝天然記念物調査報告書』に詳しく（略）。次に郷土史における足跡も見逃すことができない。『中頸城郡誌』（昭和十五年―十六年）（略）。『能生谷村誌』『安田村誌』も、その例である。秀平にはまた中世の郷土史に関する著書も多い。（略）『上杉房定の人物』（昭和十年）、（略）『本庄氏の興亡』（昭和十一年）、（略）『新潟県史要』（昭和十一年）、（略）『吉野朝の越後勤王党』（昭和十三年）、（略）『上杉房能公』（昭和三十二年）。これらはすべて、各種の資料を根拠に展開された県内中世史の正確な一コマといえる。そしてさらに時代を拡大し、これまでの全収集資料を駆使して、詳細明確にまとめたのが、晩年の大著『新潟県史』五卷（昭和三十四―三十九年）である。（略）。刊行中の昭和三十八年、新潟日報文化賞に輝いた（略）。体調を崩しながら著述に励んだ秀平は、この労作が完成してまもない昭和四十一年一月十四日、老衰のため満八十一歳の生涯を終えた。七回忌の昭和四十八年、三人の息子たちが一族の墓地（中条町）に

新しく建てた「斎藤家之墓」で、今は安らかに眠り続けている。

以上の記載に従って、校歌の作詞者平野秀吉と校長斎藤秀平との関係をまとめると表1および図5となる。ちなみに、前述のうちで最も信頼できる文献は、斎藤自身が記した③の「著者の略歴」であろう。これに基づいて、平野秀吉と斎藤秀平の関わり合いを整理し、考察を加えると次の三点に集約される。

(ア) 平野秀吉は一八七三(明治六)年六月五日生まれ、斎藤秀平は一八八四(明治十七)年十月三十日生まれであり、平野は斎藤に比べて十歳五ヶ月ほど年長となる。

(イ) 斎藤秀平は一九〇七(明治四十)年三月三十一日に高田師範学校を卒業。同校が四年制の学校であることを勘案すると、斎藤は一九〇三(明治三十六)年四月に入学したことになる。平野秀吉は一九〇一(明治三十四)年四月八日に高田師範学校へ赴任しているため、斎藤は平野が赴任して三年目の入学生となる。したがって、斎藤は高田師範学校に赴任間もない平野の教え子であり、さらに、斎藤が一学年の終わり(一九〇四(明治三十七)年三月十二日)から卒業するまで、平野が舎監を兼任していたことから、斎藤は公私にわたり平野の影響を受けていたと考えてよい(図5)。また一九〇六(明治三十九)年九月一日時点の生徒名簿には⁵⁵、「第四学年乙組」「北蒲原・平・農・齋藤秀平」(表記は「郡市・族・兼修・氏名」を示す)の記載がみられる。斎藤が四学年のときの高田師範学校は甲と乙の二組か

らなり、それぞれ三十二名、三十四名の計六十六名が学んでいたことが明らかとなった。

(ウ) 斎藤秀平は小千谷高等女学校校長として赴任するまでの七年間、すなわち一九二五(大正十四)年三月三十一日から一九三二(昭和七)年三月三十一日までの間、高田師範学校で教諭兼舎監長をしており、同校の授業嘱託をしていた平野秀吉とは同僚となる(図5)。そのため、斎藤は平野の教え子であり同僚であるともいえる。またこの頃、平野はすでに校歌作詞者としてかなりの実績があるため、斎藤は自身が校長を務める小千谷高等女学校の校歌を平野に依頼したものと考えられる。

六. 結び

小千谷高等女学校における校歌制定の過程をまとめると図1となる。また作曲者大和田愛羅の人となりは前述のとおりであり、作詞者平野秀吉と校長斎藤秀平の関係をまとめると図5および表1となる。これまで述べてきたことを総合的に考えると、次の三点に集約される。一つ目は、小千谷高等女学校の最初の校歌(昭和三十八年)は一九二八(昭和三)年四月一日の県立移管を記念して制定されたものであり、同年十月二十八日、同校で開催された御大典記念音楽演奏会に大和田愛羅が出演したことを縁として作曲されたものである。二つ目は、小千谷高等女学校の二番目の校歌(昭和八年)は一九三二(昭和七)年の移東決定とそれに続く、一九三三(昭和八年)の新校舎着工を記念して制定されたものであり、当時の校長斎藤秀平が高田師範学校の恩師兼同僚であった平野秀吉に作詞を依頼したものである。大

⁵⁵ 新潟縣高田師範學校「明治三十九年十二月 新潟縣高田師範學校一覽」
新潟縣高田師範學校,1906,p.84。

和田愛羅は「昭和五年⁵⁶に文部省唱歌の編集機関である日本教育音楽協会員」に就任し⁵⁷、音楽教育において著名であったために最初の校歌（昭和三十八年）の曲をそのまま二番目の校歌（昭和八年）に利用したと考えられる。したがって二番目の校歌は歌詞のみの変更に留められた。三つ目は、平野秀吉作詞による校歌は高田師範学校の卒業生兼同僚であった斎藤秀平により依頼されたものであり、高田師範学校が校歌制作の拠点的な性格を担っていたことを追補することができた。

七. 後記

平野秀吉と大和田愛羅の接点について解説を加えたい。大和田愛羅の略歴によれば、一九〇五（明治三十八）年三月に新潟県立新潟中学校を卒業している。このことから推察すると、大和田は一九〇〇（明治三十三年）四月に同校へ入学したことになる。平野秀吉は同年三月二十一日まで同校で教諭として勤務しており、平野と大和田は入れ違いとなる。偶然とはいえ大変奇妙な縁である。

また斎藤秀平が滋賀県で知遇を得た喜田貞吉（表1）と、吉田東伍の関係について補足したい。『小伝吉田東伍』によれば⁵⁸、「一九〇一（明治三十四）年、後に早稲田大学となる東京専門学校で講義をしていた喜田が文部省へ就職することとなり、その後任として地名辞書編さん中の東伍を推せん」し、さらに「同校の経営に深くかかわって

た市島春城のうしろだてもあって、東伍は文学部史学科の講師に」就任する。このことから吉田東伍と喜田貞吉、そして斎藤秀平の意外な接点がありそうである。

最後に本研究を進めるにあたり、中村忠夫先生（中村内科消化器科医院長）には小千谷高等女学校の校歌（読み仮名を含む）とそれに關する貴重な資料をご提供いただきました。板垣慎一先生（村上歴史文化館副館長）には大和田愛羅の人となりについて教えていただきました。川村知行先生（上越教育大学）には私の拙い文章を読んでいただきました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

〈筆者・〒九五九一〇四二二 新潟市西蒲区桑山三二六〉

⁵⁶ 西暦一九三〇年。

⁵⁷ 同30。

⁵⁸ 安田町立吉田東伍記念館『小伝吉田東伍』安田町立吉田東伍記念館,1999,p.21。

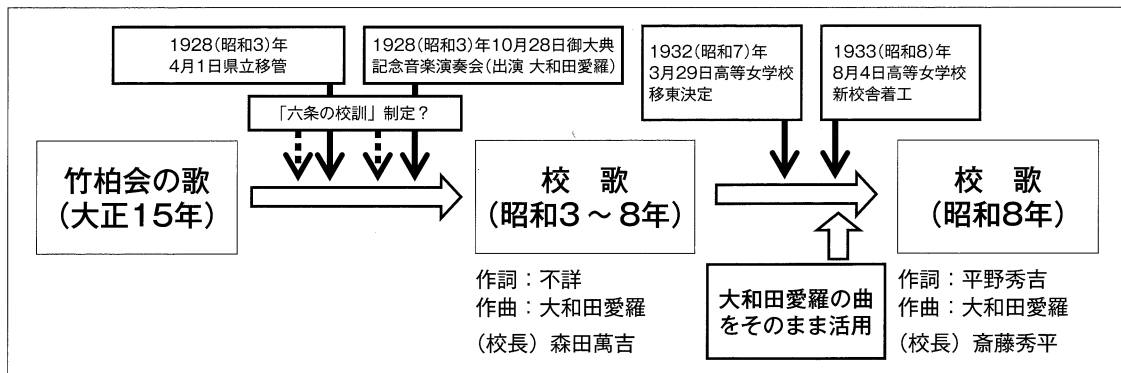


図1. 小千谷高等女学校における校歌制定の過程



図2. 「汽車」の碑



図3. 大和田家の墓碑 (正面)

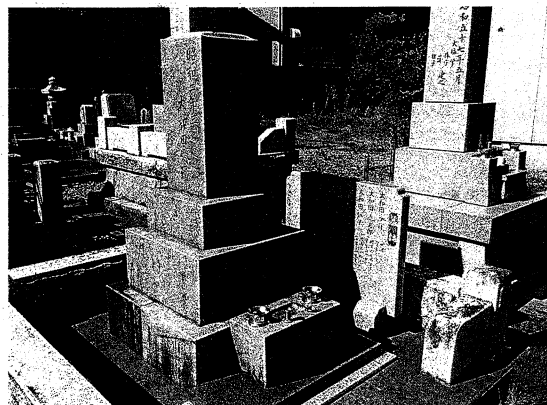


図4. 大和田家の墓碑 (脇)

図2～4は、
平成28年7月24日(日)
横田撮影。

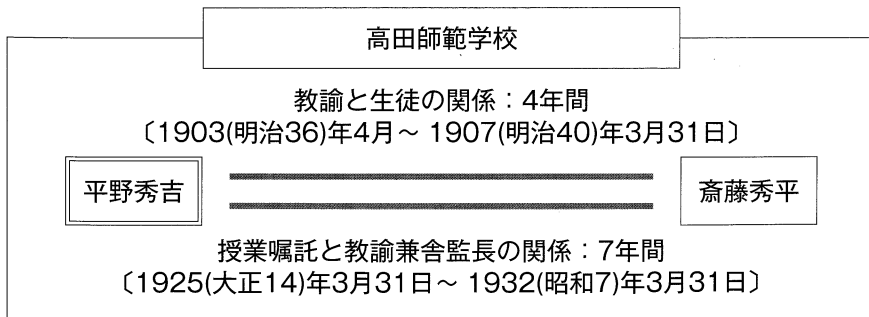


図5. 平野秀吉・斎藤秀平と高田師範学校の関係

表1. 平野秀吉の略歴と斎藤秀平の関係

平野秀吉		斎藤秀平	
西暦(号年)	年齢	年齢	事 項
1873年(明治6年)	1歳	6月5日	西蒲原郡巻村290番地戸に平野兵吉長男として生れる。
1875	3	10月17日	弟彦作誕生。
1879	12	6月5日	西蒲原郡巻小学校入学。
1881	14	9	
1884	17	12	10月30日、北蒲原郡中桑町に斎藤文七郎長男として生れる。外祖父松本俊平翁が秀平と命名。
1885	18	13	
1886	19	14	3月26日、西蒲原郡巻小学校卒業。
1887	20	15	4月、巻小学校を退職、西蒲原郡上村国上小学校教授兼生。
1888	21	16	4月、西蒲原郡弥生小学校教授兼生。
1890	23	18	11月1日、尋常科教員免許状受領。
1891	24	19	2月26日、西蒲原郡灰方尋常小学校(現、燕市川前小学校の前身)訓導兼校長(18歳)。9月、歌集「つれづれ草紙18巻」。
1892	25	20	3月、高等科教員免許状受領。8月、東京において大日本教育会の1ヶ月にわたる夏期講習会受講。9月27日、西蒲原郡中野尋常小学校、10月、師範録「松風」上京日記執筆。12月27日、無錫校舎に上り新設の小学校本村主任教員免許状受領。
1895	28	23	7月16日、「実用文典」出版(東京吉川弘文館)。文部省検定試験合格、尋常師範学校、尋常中学校、高等女学校の国語科教員免許状受領。9月13日、新潟県尋常中学校教授嘱託。
1896	29	24	2月25日、同校助教諭。
1897	30	25	3月29日、水谷コトヂと結婚。新居は新潟市学校町通り2丁目。
1898	31	26	6月9日、文部省検定試験合格、師範学校、尋常中学校、高等女学校の漢文科、習字科免許状受領。
1899	32	27	2月10日、新潟県尋常中学校教諭。4月1日、新潟県中学校教諭。
1900	33	28	3月22日、富山県第三中学校(現、富山県立魚津高等学校)教諭。長男秀夫誕生。
1901	34	29	4月8日、新潟県高田師範学校教諭。作事町(現大手町)に住す。
1902	35	30	3月8日、長女愛子誕生。12月28日、「国語声光学」出版(東京・国光社)。
1903	36	31	
1904	37	32	3月12日、高田師範学校倉庫兼任。富士登山。9月12日、二男不二夫誕生。9月14日、父兵吉死亡。
1905	38	33	10月、新潟県立三条中学校(現新潟県立三条高等学校)〔作詞：平野秀吉、作曲：不詳〕。
1906	39	34	11月30日、二女下枝誕生。
1907	40	35	
1908	41	36	白馬岳登山。
1909	42	37	1月12日、養任待遇。7月4日、三女ナヨ子誕生。
1910	43	38	
1911	44	39	10月30日、三男多聞誕生。秋より、現上越市西城町3丁目7番地(不二夫宅)。
1913(大正2)	41	41	5月19日、長男秀夫死亡(享年14才)。
1915	43	43	4月10日、母ナヨ子死亡。5月15日、「綴り方教授の根本的研究」出版(東京・六合社)。6月20日、同窓会校友会主催勤続十五年謝恩表彰。
1916	5	44	2月2日、四女幸子誕生。新潟県高田師範学校(旧譜)〔作詞：平野秀吉、作曲：小林禮〕。
1917	6	45	
1918	7	46	9月22日、新潟尋常高等小学校(現新潟市立新津第一小学校)〔作詞：平野秀吉、作曲：小林禮〕。
1919	8	47	3月28日、高等官六等待遇。
1920	9	48	12月20日、能生尋常高等小学校(現糸魚川市立能生小学校)〔作詞：平野秀吉、作曲：小林禮〕。
1921	10	49	8月5日、高等官五等待遇。8月6日、依願退職。9月30日、叙勲六等瑞宝章授与。9月30日、新潟県高田師範学校教授嘱託。新潟県高田師範学校(新譜)〔作詞：平野秀吉、作曲：小林禮〕。
1922	11	50	稲田尋常高等小学校(現上越市立稲田小学校)〔作詞：平野秀吉、作曲：小林禮〕。戸野小学校、上雲小学校(現上越市)〔作詞：平野秀吉、作曲：山本寿〕。
1923	12	51	8月、「万葉集全釈」第一次原稿編纂。
1924	13	52	10月3日、新潟県史跡名勝天然記念物調査委員。3月25日、小池尋常高等小学校(現藤市立小池小学校)〔作詞：平野秀吉、作曲：田中信太郎〕。12月1日、川崎尋常小学校(現長岡市立川崎小学校)〔作詞：平野秀吉、作曲：小出浩平〕。
1925	14	53	
1927(昭和2)	55	7月15日	「日本アルプス登山案内」出版(東京・斯文書院)。
1928	56	10月20日	「山嶽歌集新集」出版(東京・斯文書院)。
1929	57	10月10日	「唐詩選全釈」出版(東京・東洋館書刊行会)。
1932	60		
1933	61	7月	「暹羅祝賀節山登山」。10月、天野原尋常高等小学校(現上越市立三郷小学校)〔作詞：平野秀吉、作曲：田中信太郎〕。新潟県立小千谷高等女学校(昭和25年4月に統合、現新潟県立小千谷高等学校)〔作詞：平野秀吉、作曲：田中信太郎〕。
1934	62	3月31日	高田師範学校教授嘱託依願退職。10月17日、高田師範学校同窓生による胸像除幕式ならびに謝恩会。
1935	63		
1936	64		
1937	65	3月	深沢尋常高等小学校(現長岡市立深沢小学校)〔作詞：平野秀吉、作曲：岩井清志〕。
1938	66		
1939	67	6月10日	「山嶽の歌高嶺いばら」出版(木曜会)。
1940	68		
1941	69		
1942	70	10月4日	吉備高麗姫山登山。5月1日、前石国民学校(昭和44年4月に統合、現糸魚川市)〔作詞：平野秀吉、作曲：石井信夫〕。
1943	71		
1944	72		
1945	73		
1946	74	5月6日	弟彦作死亡。6月、門下生主催金鐘式祝賀(高田市大町中学校体育館前)。
1947	75	5月27日	「真寛と万葉集」出版記念講演会。
1948	76	12月	「真寛と万葉集」出版記念講演会。
1948	76	10月9日	妻コトチ死亡。
1950	78		
1951	79	3月19日	胸像再建除幕式。
1953	81		
1954	82		
1957	85		
1959	87		
1961	89		
1962	90		
1963	91		
1964	92		
1966	94	9月15日	「真寛と万葉集」増補改訂版出版(文理書院)。11月22日、「真寛と万葉集」出版記念講演会。
年代不詳			高田小学校(現上越市)〔作詞：平野秀吉、作曲：不詳〕。 西能生小学校(昭和37年4月に統合、現糸魚川市)〔作詞：平野秀吉、作曲：田中信太郎〕。 桂道小学校(現校第一分校)(昭和37年4月に統合、現糸魚川市)〔作詞：平野秀吉、作曲：田中信太郎〕。

引用文献

- 小泉孝『巻町双書第17集 平野秀吉』巻町役場,1971,pp.89-92.
- 横田善衛『会津八一と恩師平野秀吉』、岡村鉄平『新潟県文人文研究第17号』越佐文人研究,2014,p.44.
- 折原明彦『校歌の風景—中越地区小中学校校歌—増補版』野島出版,2006,校歌作詞・作曲者等一覧,pp.3-14.
- 上越市教育委員会『のびのびのうたの国—上越市小中学校校歌集—歌謡集—』上越市有線放送電話協会,2013,pp.11-12,15-16,25-28.
- 糸魚川西園城小中学校PTA連合会『校歌集—校歌収録CD—』糸魚川西園城小中学校PTA連合会,2004,pp.31-32.
- 新潟県立三条高等学校創立百周年記念誌編集委員会『創立百周年記念誌—想憶—』新潟県立三条高等学校同窓会,2003,p.30.
- 新潟県立小千谷高等学校『小千谷高等学校創立百周年記念事業実行委員会,2003,p.907.
- 能生町史編纂委員会『能生町史 下巻』能生町役場,1986,p.180,184,187.
- 佐々木美智子『福考古学研究に寄与—斎藤秀平』、竹田武夫『郷土の碩学』新潟日報社,2004,pp.132-134.
- 牧田利平『越佐人物誌 上巻』野島出版,1972,pp.339-400.
- 斎藤秀平『新潟県史 上杉時代篇(上巻)』野島出版,1961,pp.413-415.